

---

# 青空の下

御子柴 隼人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青空の下

### 【Nコード】

N8977A

### 【作者名】

御子柴 隼人

### 【あらすじ】

一人、公園へと向う。それは運命の始まりだった。偶然は必然的に起る。君に会えたのも、君と話したのも偶然であり必然なのである。

く 出会い く

うすく暗いクリーム色の空。  
外はまだ、白い雪の残る季節。

僕は自宅近くの公園に向かっていた。  
途中、自動販売機ホットコーヒーを買った。  
そして、飲まずにポケットに入れた。

…公園にて…

この公園には良く来る。  
ベンチからの見晴らしもいいし、好きな場所だ。

ベンチに座る。

「ふう…家に帰るの嫌だな…」  
僕は独り言のように呟いた。

…。  
目の前には長い黒髪の女の子がいる。  
その黒い髪が風に揺れる。僕はそんな君に見とれていた。

「人の顔をジロジロみるなんてマナー違反です!」  
急に女の子が口を開いた。

急に話かけられて僕は驚く。

「え? あ…。ごめん…」

とりあえず謝ってしまった。

「なんで謝るの? どうして、そんなに暗い顔してるの…?」

僕は女の子からの質問に答える。

「だって君がマナー違反って言っから…! 暗い顔は生まれつき! …  
まあ…他にも少し理由があるんだけど…」

「理由って何なんですか…?」

また女の子が僕に質問する。

他人の、この子に話したところで何か変わるわけでもないのに僕は正直に答える。

「今日、親父の都合で家に女の子が来るんだってさ。」

「女の子は嫌いなんですか…?」

また質問してくる。

「嫌いってわけでもないんだけど…」

「じゃあ…?」

「僕あんまり女の子と喋らないし…家に来てもどう接していいか分からなくて…」

僕はそう答えた。

「なんだあゝ…クスッ」

「なんで笑うのさ！こっちは真剣に悩んでるのに！！」

「いや…ただね。あ？笑い過ぎて涙出て来ちゃった…。んとね。今のままでいいと思うよ？私と今、話してるみたいに。」

「そうかなあ…？」

「うん！大丈夫大丈夫。私もね、今日この街に引越してきたばかりなんだ。だから男の子と仲良くなれるか不安だったけど、案外大丈夫みたい。クスッ」

「あ！また笑った…。」

（ （

携帯の音が鳴る。

どうやら女の子の携帯らしい。

「もしもし？うん。はい。わかった。うん。じゃあね  
ピッ

「なんだったの？」

「片付けがあるから帰って来いってさあ。ってことで私帰るね！！」

「そつか。うん。今日はありがとね！」

「ううん。いいよ別に！それじゃ」

そう告げると女の子は手を振って走って行った。

「あ…名前…聞くの忘れちゃった…」

僕は最後に重大な事に気付いたがもうおそかった。

そして、ポケットに入れた冷めたコーヒーを一気に飲みほし、帰路についた。

## 第一章

「出会い」

終。

## ゝ出会いゝ（後書き）

連載ですが…頑張っている作品にしたいと思います！！

## ゝ思わぬ再会ゝ

ふと、空を見上げると晴れ間が見える。

今は、そんな天気だ。

天気はさておき、問題は家に来る女の子の事だ。

僕はあまり女の子と話したことがない。

なぜなら僕は高校まで男子校だったから…。

もう一つ最大の原因は…

「家族」

。

僕の家族は

親父・母さん・弟、である。

今、家族はバラバラだ。

ぞくに言う、家庭崩壊、と言うやつだ。

親父は海外で働いていて全く帰って来ない。

母さんは僕が小さいころに亡くなっている。

弟は毎日帰って来ない。帰ってきてても深夜である。

あと一人、執事のロマネが小さいころから家にいるが、家族事には深く関わらずにいる。

まあ本人が言うに執事は執事らしく。だそうだ。

昔は家にも家事をする

「メイド」

なる人がいたが、今はもういない。執事のロマネに任せきりだ。  
あさな・ニックネームのようなもの  
ちなみにロマネとは彼の字であり、ごく普通の日本人である。



こんな感じで僕の家には小さいころから  
「女性」

と言う存在が無いのである。

そしてそんな事を考えていると…

自宅前。

着いてしまった。

「ふう…ヤダなあ…」

そんな言葉を漏らす。

それにしても親父のやつ、海外で生きているかどうか分からないくらいだったのに。

急に女の子を家に招くなんて…

家に帰って来ないくせに身勝手だ。

世間では親父のような人を自己中と言うのだろう。

家は比較的広く、外装は少し古い洋館のようだが、内装は去年工事が入り綺麗になったのだ。

そんなこんなでドアの前に立ち、呼び鈴を鳴らす。

ジー　ジー

すこし古い型なのでピンポンなんて音では無い。

カシャ、ガチャ…

鍵が開く音だ。続けてドアを開ける音が聞こえてくる。

いつもは鍵が開くだけなのだが…

「お帰りなさい」

そこには見知らぬ女性が立っていた。

「まつ…間違いました」。

…。

間違っ訳がない。ここは確実に僕の家だ！

もう一度、今度は自分からドアを開けてみる。

「お帰りなさい」

…？やっぱり知らな…

「あっ！！」

僕は気付いた。公園で出会ったあの仔である。

「なんで君が？あつ。近くに引っ越して来たんだ？」

僕はとっさに思いあたる事を聞いてみた。

「まあ…そんなところです。近くと言うか…この家に、なんですけどね」

「へえ そうなんだ？この家に…」  
ん？何かおかしい。

「んあゝ？こ・の・家！？」

「ええ。そうよ」

「んじゃあ公園で会った時はもう僕の事知ってたの!？」

「そうじゃないよ!あれは偶然!クスッ」

「なんで笑うのさ...? やっぱ知ってたんだ? 黙ってるなんてひどいよ...!」

「だ〜からっ! 知らないって言ってるでしょ! 私が笑ってるのは偶然に対して! この家に来て少しでもこの家のみんなの事知りたかったから写真見せてもらったの!」

「え〜!?! 誰に!?!」

弟が家にいる訳もないのに...

「ロマネさん! 写真みたら貴方がいてビックリ!! 嘘だと思った...。あんな人が一緒だったらイイな。なんて考えたらホントに貴方なんだもん!」

「あ〜... ビックリした... 寿命が10年縮んだよ...」

「そんなんで10年も寿命が縮むはずないじゃない クスッ」

「まあ... それもそうだね! ハハ」

僕は苦笑いを浮かべた。

「まあ... 立ち話もなんだから家に入って」

「おじゃましま〜... ってここは僕の家か...! 調子狂うなあ...」

「まあまあ。気にしないで。で？帰って来た時の挨拶は？」

「うん。た…ただいまっ！」

久しぶりに言った一言に少し気恥ずかしくなって僕は少し頬を赤らめた。

## 第2章

「思い掛けない再会」

終

ゝ思わぬ再会ゝ（後書き）

小説なんて初めてなので、いい小説が書けるように頑張ります

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8977a/>

---

青空の下

2011年3月10日00時23分発行